

日本アニメに対する英語字幕翻訳の年代による変化

—日本語のセリフと複数の英語字幕翻訳のテキストマイニング—

保坂敏子(日本大学) 島田めぐみ(日本大学)

1. 研究の背景と目的

日本アニメが海外で高い人気を集めるようになって久しい。例えば、宮崎駿監督の作品は、アメリカにおいて1985年に『風の谷のナウシカ』(1984)が公開されたことを皮切りに、1993年には『となりのトトロ』(1988)がG指定¹を受けて一般的にも広く受け入れられるようになった。その後、2001年に公開された『千と千尋の神隠し』は、2002年のベルリン国際映画祭で金熊賞を受賞し、さらに2003年にはアカデミー賞長編アニメーション部門賞を受賞するなど、映像作品としても高い評価を得ている。また最近では、新海誠監督の『君の名は。』(2016)が、世界135の国と地域で海外配給され、日本映画として全世界での興行収入が歴代最高になるほどの注目を集めた。このような日本アニメの海外展開を支え、海外の視聴者を惹き付けるのに大きな役割を担っているものとして、各国語版に訳された「字幕翻訳」が挙げられるだろう。では、ことばと文化の壁を越えて、世界中の視聴者が日本アニメを楽しめるようにするために、字幕翻訳ではどのようなストラテジーが施されているのだろうか。

字幕翻訳では、視聴者への分かりやすさが重要視されるため、起点テキストである日本語のセリフを目標テキストのことばや文化に同化させる「同化翻訳(domestication)」が行われると言われている。同化翻訳とは、起点テキストの異質性を排除し、受け手に翻訳であることがわからないようにするためのマクロレベルの翻訳ストラテジーのことで、同化翻訳された作品では視聴者はまるで翻訳ではないかのように作品を楽しむことができるという。字幕翻訳者は、起点のセリフを目標文化に同化させるために、個々の語の意味よりも発話の全体的なコミュニケーション上の意図を優先し、元の発話の削除、凝縮、改変といったミクロレベルの翻訳ストラテジーを使用すると言われている(ベーカー&サルダーニャ編 藤壽監訳 2013)。しかし、近年、この同化翻訳については、言葉に込められた重要な側面や異質性を排除し、徹底的に単純化された「意味」を尊重するものであり、観客の読み取る力を信頼していないという批判の声も出てきている(武田編著 2017)。

では、世界に広く流通している日本アニメ作品において、字幕翻訳はどのような様相を示しているのだろうか。オリジナルの日本語のセリフは翻訳によりどのように変容しているのか。そして、それは時代によって変わっているものなのか。本研究では、このような問題意識から、世界の視聴者に受容されている一つの日本アニメ作品の時代の異なる英語字幕を取り上げ、日本語のセリフと複数の英語字幕翻訳のテキスト間の変容と英語字幕の時代的な変化について、テキストマイニングによる分析を行う。研究の目的は、英語の字幕翻訳について時代による差異があるかを明らかにし、さらに、その変化の背景について探ることである。これまでオリジナルの日本語のセリフと英語字幕翻訳について質的に分析した研究はあるが、量的に分析したものは少なく、また、同じ作品の時代の異なる2種類の英語翻訳を量的に比較した研究は、管見の限り見当たらない。

2. 研究の方法

2.1 分析の対象作品

本研究の分析の対象は、1988年に公開されたアニメ映画『となりのトトロ』(宮崎駿監督 以下:『トトロ』)で、日本語のセリフと以下の2つの時代の異なる英語字幕を分析資料とした。

- ①ブエナ・ビスタ・ホーム・エンターテイメント版DVD(2001年版)に収録された英語字幕(以下『ブエナ版』)
- ②ウォルト・ディズニー・スタジオ版DVD(2014年版)に収録された英語字幕(以下『ディズニー版』)

¹ 映画には、鑑賞可能な年齢層を細かく規定したレーティングシステムがある。G指定とは、年齢の制限なく、誰でも鑑賞可能な映画であることを指す区分である。

『トトロ』は、昭和30年代前半の日本を舞台に、田舎へ引っ越してきた草壁一家と、不思議な生き物トトロとの交流を描いた作品で、前述の通り、アメリカでもG指定を受けるなど、子供から大人まで幅広い年齢層に愛されている作品である。英語の字幕は、日本で公開された後に、まず1993年にStreamline Picturesにより最初の英語字幕が作成された。その後、宮崎監督の作品の制作会社であるスタジオジブリと提携を結んだウォルト・ディズニー・カンパニー(WDC)が2006年に字幕を全面的に改定している。『ブエナ版』は、Streamline Picturesの字幕翻訳を採用しており、『ディズニー版』は新しく作成された字幕である。本研究では、この2つの英語字幕テキストを、時代の異なる英語字幕翻訳テキストとして分析を行う。

2.2 分析の方法

DVDに収録されている日本語のセリフと2種類の英語字幕テキストの文字化資料を作成し、KH Coderを用いてテキストマイニングを行った。分析は①「語彙の出現頻度」の分析と、②「登場人物ごとの抽出語による対応分析」の2種類を行った。①は、語彙の出現頻度から変容の全体像を検証するため、また、②は、主要な登場人物の関係性に変容があるかを明らかにするためである。日本語の分析項目は内容語を中心に動詞、名詞、形容詞、形容動詞、副詞、感動詞、を取り上げた。英語の分析の枠組では、日本語の項目に人称代名詞を別立として加えた。

3. 分析の結果と考察

3.1 語彙の出現頻度

語彙の出現頻度から変容の全体像を検証するため、『トトロ』の日本語のセリフと『ブエナ版』『ディズニー版』の2つの英語字幕翻訳に対してテキストマイニングを適用した。分析の結果、抽出された語彙は、日本語1,584語、『ブエナ版』3,403語、『ディズニー版』2,110語であった。それぞれのデータについて語彙の出現度順に並べ、上位20語を取り出した。名詞を出現度順に並べた結果は表1、表2、表3のとおりである。

表1 日本語セリフの名詞

表2 『ブエナ版』字幕の名詞

表3 『ディズニー版』字幕の名詞

1	メイ	タグ	91	1	be	Verb	291	1	be	Verb	229
2	する	動詞B	52	2	I	PRP	186	2	I	PRP	131
3	あっ	感動詞	42	3	you	PRP	163	3	you	PRP	106
4	お父さん	名詞	32	4	ha	Foreign	102	4	it	PRP	72
5	お母さん	名詞	28	5	it	PRP	94	5	not	Adv	58
	いる	動詞B	28	6	not	Adv	67	6	she	PRP	49
7	なる	動詞B	25	7	we	PRP	63	7	MEI	ProperNoun	39
8	うん	感動詞	24	8	MaI	ProperNou	58	8	do	Verb	37
9	トトロ	タグ	21		she	PRP	58	9	here	Adv	32
10	おばあちゃん	タグ	18	10	have	Verb	49	10	we	PRP	31
	ある	動詞B	18	11	do	Verb	46	11	come	Verb	30
12	あ	感動詞	17	12	go	Verb	42	12	they	PRP	28
13	行く	動詞	16	13	they	PRP	41	13	get	Verb	24
14	家	名詞C	16	14	what	W	39	14	go	Verb	23
15	出る	動詞	15	15	he	PRP	38		have	Verb	23
16	待つ	動詞	14	16	come	Verb	36	16	Dad	ProperNoun	19
17	病院	名詞	13	17	get	Verb	31		too	Adv	19
	サツキ	タグ	13	18	see	Verb	30		see	Verb	19
	そう	副詞B	13	19	my	PRP	28	19	he	PRP	16
20	木	名詞C	12	20	here	Adv	26		my	PRP	16

分析の結果、日本語のセリフに6種類見られた呼称(メイ、お父さん、お母さん等)について、等価の人名・親族名称に訳したものは、『ブエナ版』では1つ、『ディズニー版』では3つで、抽出語総数の多い『ブエナ版』の方が少ない『ディズニー版』より人名・親族名称への直訳が少なかった。これは呼称に関する変容は『ブエナ版』の方が大きいことを意味すると思われる。また、英語翻訳では両者とも人称代名詞が多く出現しており、日本語の呼称はこれに置き換えられたことが窺える。

3.2 登場人物ごとの抽出語による対応分析

登場人物の使用する言葉による関係性に変化があるかを見るために対応分析を試みた。その結果が、図1、図2、図3である。日本語版では、お母さんとカンタのおばあちゃんは重なりが強く、他の人物はそれぞれ独立していた。これに対し、『ブエナ版』では、お父さんとサツキが重なり、『ディズニー版』では、サツキとカンタが重なるという違った結果となった。全体的には、『ディズニー版』の方がオリジナルの日本語の関係性に近いことがうかがえる。

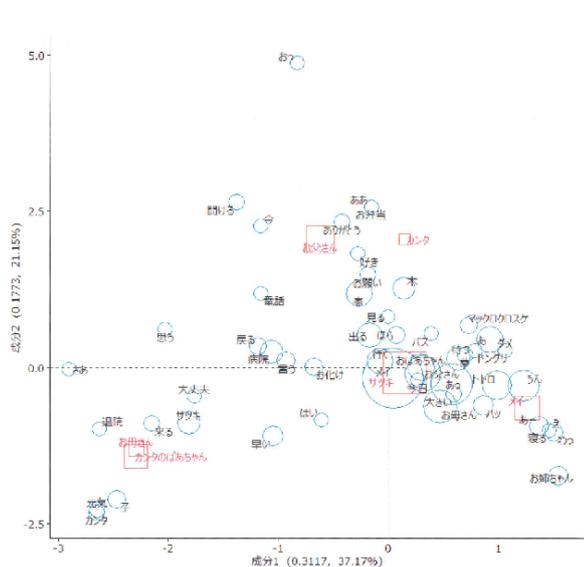


図1 日本語セリフの登場人物の対応分析

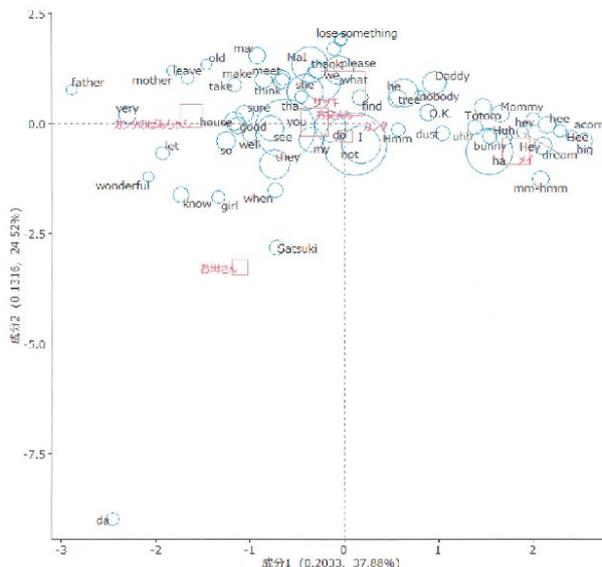


図2 『ブエナ版』の登場人物の対応分析

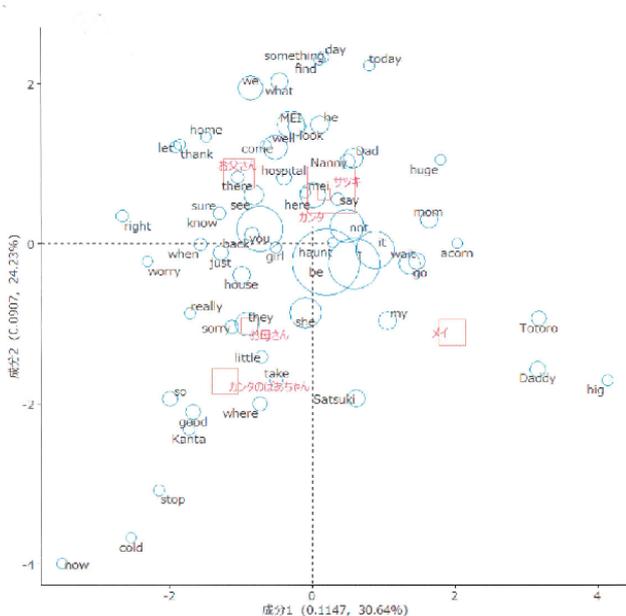


図3 『ディズニー版』の登場人物の対応分析

4. おわりに

今回の分析で、日本語のセリフで出現頻度の高い呼称について、『ブエナ版』の方が『ディズニー版』より起点テキストからの変容が大きいことが分かった。また、登場人物の関係は、『ディズニー版』の方が『ブエナ版』より日本語後のセリフと類似性が高く、『ブエナ版』の方が『ディズニー版』より変容が大きいことが分かった。これらの結果から、年代の古い『ブエナ版』字幕翻訳の方が英語への同化の傾向が強くなり、年代の新しい『ディズニー版』字幕翻訳の

方がオリジナルを保持していることが窺えた。映画の字幕翻訳は、これまで同化翻訳の戦略が適応されるとされてきたが、今回の量的分析により、新しい時代の字幕翻訳は、より起点テキストに近い翻訳になっているのかもしれない。では、その変化はどうして起こったのであろうか。

字幕翻訳に同化翻訳の傾向が少なくなった背景には、まず、研究の背景に述べたような、映画の観客に対する字幕翻訳家の認識が変化していることが挙げられるだろう。ICT やメディア環境が進展し、世界各地の情報へのアクセス、異文化間の接触が容易になった現在、映画の視聴者は映像から異文化要素を読み取る能力が一段と高くなっているのかもしれない。その場合、必然的に、字幕翻訳も同化翻訳ではなく異質なものを残すことが可能になるだろう。また、日本アニメに特化してその背景を考えてみると、『トトロ』が最初にアメリカで公開されるために字幕翻訳が作成された1993年頃は、日本アニメはまだそれほど世界で注目されておらず、そのため単なるアニメーションとして、目標言語の視聴者が楽しめるように言語と文化の同化翻訳が施されていたのかもしれない。その後、日本アニメが世界で親しまれるようになり、それが日本への興味を引き出し、日本語学習のきっかけとなるような時代になると、視聴者の側に、オリジナルの要素、視聴者にとっては異質な要素をそのまま楽しみたい、つまり、日本アニメから日本文化を感じたいという気持ちが強くなってきたのかもしれない。

本研究は、字幕翻訳の傾向が年代により異なることの一端を示すことができたと思われるが、それが、どのような背景や理由によるものかを知るためにも、今後、時代の異なる日本映画や日本アニメの字幕翻訳を対象に、字幕翻訳の分析を続けていきたい。

謝辞 本研究はJSPS 科学研究費・基盤(C)17K02867 の助成を受けたものである。

参考文献

武田 珂代子編著 (2017). 翻訳通訳研究の新地平 映画, ゲーム, テクノロジー, 戦争, 教育と翻訳通訳 晃洋書房
ベイカー, M. & サルダーニャ, G. (編) 藤壽文子監訳 (2013). 翻訳研究のキーワード 研究社